

泉 貴久・梅村松秀・福島義和・池下 誠編
『社会参画の授業づくり—持続可能な社会にむけて』

金 玗 辰*

近年、価値・態度の育成までを含む参加 (Participation) を基盤とする地理教育を求める世界的な動きが見られる。その背景の一つとして、ユネスコによるESD (持続発展教育) の推進と密接な関係を挙げることができる。そもそもESDは、2002年南アフリカ共和国で開催された「持続可能な開発に関する世界首脳会議 (ヨハネスブルグ・サミット)」にて、日本の提案により始まり、「国連持続可能な開発のための教

育の10年 (UNDESD, 2005-2014)」の最終年である2014年に国際大会が愛知・名古屋で開かれる。このようにESDと日本は深い関係があるが、学校現場ではESDの実践に戸惑いを感じることも多い。そのような中、本書は中学・高校の地理授業でESDの観点をどのように取り入れることができるのかを、実践編 (12編)、理論編 (3編)、コラム (10編) により提案する。

実践編 I 身近な地域

- 1.1 身近な地域の調査—先人の思いと社会参画—
- 1.2 「安全な生活」とは?—より良い生活環境を実現するために—
- 1.3 みどりは町の財産!—Google映像で緑被率をしらべよう—
〈コラム〉国連ミレニアムエコシステム評価

II 社会参画

- 2.1 輪中地域における持続可能な土地利用の開発
- 2.2 地域力に根ざした持続可能な社会づくりと市民参加
- 2.3 日本のエネルギー問題を考える—原発総選挙—
〈コラム〉ESD3領域15分野/ESDと自己実現

III 多文化・相互依存

- 3.1 ムスリムとの多文化共生を考える
- 3.2 持続可能なオーストラリアのあり方—多文化主義の視点を通して—
- 3.3 モノの移動と世界の相互依存性—モノの相互依存から人々の相互理解・支援交流へ—
〈コラム〉多文化共生/新学習指導要領とESD

IV 地球的諸課題

- 4.1 アマゾン熱帯林開発の現状と持続的発展
- 4.2 謎の円を追え—水問題と地球温暖化問題と食料問題—
- 4.3 人口問題と自己決定権—将来何人子どもを持ちたいですか—
〈コラム〉生物多様性/フードマイレージ/自己決定権

理論編 1 ESDの概念・特徴と地理教育—ESDの普及・発展へ向けて—

- 2 持続可能な地域社会の構築に向けて—生物多様性から社会的多様性へ—
- 3 IGU/CGEが提起する21世紀地理教育パラダイム—「人間—地球」エコシステム—
〈コラム〉ロカリティ/開発コンパス

*北海道教育大学

上記のように、本書は先に実践編があり、関連する学問的・社会的な背景を説明する理論編が後に続く構成である。いかにESDと関連した授業実践を行うかという本書の目的から見れば、実践編に重みを置いているかがわかる。しかし、本書評では授業実践をより深く理解するために、先に理論編およびコラムについて説明したい。まず泉貴久がESDと地理教育の関係を日本、イギリス、フィンランド、国際地理学連合地理教育委員会(IGU・CGE)の取り組みを事例に説明する。福島義和は、ロカリティの観点から持続可能性を考え、生物多様性・社会多様性の重要性を論じる。特に福島の提案する「持続可能な地域社会の構築に向けてのモデル(p.120)」は、本書の表紙を飾るほど重要な枠組である。本モデルは、コラムでも説明している開発コンパス(自然(N)、経済(E)、社会(S)、政治(Who decide?))を発展させたものと思われるが、本書の実践成果を踏まえながら追究すれば一層の発展が期待される。理論編の最後に、梅村松秀が21世紀地理教育パラダイムとして、持続的な開発のために地球を一つのエコシステムとしてとらえ、全体のバランスを実現するシステム・アプローチの必要性を提案する。このような理論編で言及されているロカリティ・生物多様性・エコシステムなど主な用語はコラムで詳しく説明されている。理論編と合わせて読むことで、これらの用語についてより深い理解を得ることができる。

次に、最も重要な比重を占めている実践編の特徴であるが、その前に「持続可能な開発」概念や学習指導要領との関係を示す2つのマトリクス(p. v~vi)が目を引く。「持続可能な開発」概念のマトリクスは、イギリスのナショナル・カリキュラム地理 key stage3や環境・食糧・農村地域省(defra)が提案した概念を引用している。一方、学習指導要領でのマトリクスは、平成20・21年版学習指導要領の中学校地理的分野と高校地理A・Bの大項目からなっている。この2つのマトリクスから、各実践が世界的な傾向を踏まえながら、日本的ESD実践を目指すものであることがわかる。また、「持続可能な開発」概念の

マトリクスは、本書を読む現場の教員がESDの観点から自分の実践を振り返る際、有用な道具になるだろう。さらに、各実践は多少異なる場合もあるものの、テーマ設定の意義、単元の指導計画、詳細な授業内容および教材例、授業のふりかえり、読者へのメッセージ、参考文献リストの順に書かれている。また、実際に授業で使った地図やワークシートなどが添付されている。そのため、現場の教員が授業のねらいや生徒たちの活動を詳しく把握でき、自分の授業に直ちに活用することができるだろう。

以上、本書の特長を述べたが、実践編の大分類について多少疑問に感じたことを述べたい。まず、これらの実践は、「身近な地域」、「社会参画」、「多文化・相互依存」、「地球的諸課題」の4項目に分類される。スケール面から「身近な地域」と「地球的諸課題」を設けたことは納得がいく。しかし「多文化・相互依存」の項目は主に人文環境を対象としているため、これと対応する自然環境に関連する項目を設けるのはどうだろうか。本書の理論編でも、生物多様性やエコシステムを強調しているため、「4.1 アマゾン熱帯林開発の現状と持続的発展」のような自然環境に注目した授業実践がもっとあっても良い。次に、これら4項目の内3つが内容項目である一方で、「社会参画」は能力項目であるため、実践においては内容と能力の両方を目的とする場合が少なくない。「社会参画」がESDにおいて最も主な概念の一つであることは間違いない。そのため、本書の題名である『社会参画の授業づくり』のように、「社会参画」はすべての実践に取り入れるべき項目ではないだろうか。

本書の最大の功績は、小学校あるいは総合的学習を中心としたESDの授業実践の現状の中で、中学・高校の地理授業での可能性を示唆している点である。ESDの観点を取り入れた新しい地理授業の実践を試みる中学・高校の教員に、必読書としてお勧めしたい。

(古今書院, 2012年8月刊, 134ページ, 3200円+税)